

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 25 日現在

機関番号：32647

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463505

研究課題名(和文) 父親としてのコンピテンシーを高めるための育児支援システムの構築

研究課題名(英文) Childcare support system to enhance competencies as a father

## 研究代表者

鈴木 幹子 (Suzuki, Mikiko)

東京家政大学・看護学部・教授

研究者番号：90269457

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：父親のコンピテンシーは、パートナーである母親との関係が重要であることが明らかになった。父親は、母親の包容力や安定性を尊重し、父親の役割を模索し、育児に取り組んでいた。父親は、子どもの成長・発達を喜び、それがコンピテンシーを高めていた。さらに、父親は育児の経験が父親自身の成長につながっていることを実感していた。父親のコンピテンシーを高めるには、夫婦への育児支援と父親達が交流し、互いのコンピテンシーを高めあう支援が必要である。

研究成果の概要(英文)：Father competency was revealed that the relationship between the mother's partner is important. Father, respecting the mother of tolerance and stability, to explore the role of the father, was working in child care. Father, joy the growth and development of children, it was to enhance the competency. In addition, his father had to realize that child care experience has led to the growth of the father himself. To increase the father of competency, and alternating current child support and the fathers to the husband and wife, it is necessary to help each other raise each other's competency.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：コンピテンシー リソースの活用 父親と母親の関係性 父親としての自覚 育児経験 育児の価値観 育児仲間 育児

### 1. 研究開始当初の背景

2009年、男性も子育てしやすい社会の実現に向けて育児・介護休業法が、2010年には次世代育成推進法が改正され、女性だけでなく男性も対象に親育成が啓蒙されてきている。2010年には「パパ・ママ育休プラス」制度の導入等をはじめとする新制度の施行により、男性が育児休業を取得しやすい環境づくりへの取り組みが始まった。中でも「イクメンプロジェクト」はこのような制度見直しと合わせ、社会全体で、男性がより積極的に育児に関わることができる一大ムーブメントを巻き起こすべく発足した。「イクメン」とは、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性のことをいう<sup>1)</sup>。女性が主体的に出産することを選択できるためには、育児をするのは女性という概念にとらわれず、男性にも育児への関心や能力を高めていくことが望まれている。しかし、男性の育児休暇取得希望者は3割程度で、実際に取得している男性は極わずかである。これから育児をしたいと思っている男性も限られた情報の中から育児を模索していかなければならず、育児をする意欲はあっても、実際にどうしたらいいのか、戸惑っている男性も少なくない。男性が育児に関われば、女性に育児の負担も軽減し、女性の産後うつ病の予防にもつながるであろう。そのためには男性の育児能力を高め、男性が積極的に育児に関わることが育児には重要である。

そこで、父親の育児に関わるコンピテンシーを明らかにし、男性自身に備わっている能力を高めていくことが必要であると考えた。コンピテンシーとは「能力」「適性」の意で、成果を上げる行動特性のことである。また、単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力とも言われている<sup>2)</sup>。本研究では、父親のコンピテンシーを明らかにし、父親のコンピテンシーを高める支援の構築を目指すことである。

最近では、父親が育児に関心を持ち、育児に関わろうとする取っ掛かりとして父親向けの手帳を発行している自治体が増えつつある。現在発行されている父親手帳を分析し、期待される父親の役割を明らかにし、父親のコンピテンシーを高める支援について明らかにしていきたいと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究では父親の親としてのコンピテンシーを明らかにし、父親が母親と共同して積極的に育児できるための父親を対象とした育児支援システムを構築することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は2部構成である。

#### 1) 期待される父親の役割-父親手帳の分

析から-というタイトルで、各自治体で発行されている父親向けの手帳を父親が主体的に育児に取り組むという課題に応じた内容であるのかを分析・検討し、期待される父親の役割とその支援について明らかにした。

2) 父親のコンピテンシーというタイトルで、父親のコンピテンシーを明らかにするために乳幼児を育児中の父親を対象に作成したインタビューガイドを用いて半構成的インタビューを行い、逐語録にして分析した。

### 4. 研究成果

1) 期待される父親の役割-父親手帳の分析から-

各自治体で発行され、2015年9月30日現在、各自治体のホームページで公開している父親向けの手帳の全17冊を収集し、分析した。収集した父親向けの手帳17冊中15冊は、妊娠期から乳幼児期にかけて順番に記載されていることから、妊娠期・分娩期・産褥期・乳幼児期の各期における父親の役割内容の分析と父親が育児に対する関心や意欲を高め、主体的に家事・育児参画をする働きかけがなされているかの分析を行った。また、対象となる父親の関心や注目を集めるために工夫されている点についても分析した。

収集した父親向けの手帳(以下、父親手帳と記す)は、妊娠期・分娩期・産褥期・乳幼児期における父親の役割という視点で分析を行った。

【結果】(1) 妊娠期・分娩期・産褥期・乳幼児期における父親の役割

妊娠期：妊娠期から子育てが始まっていることが強調されていた。妊娠期での父親の役割としては、妊娠中から母親を気遣い、自分のことは妻に頼らずにすること、出産や育児に向けて妻と共に準備することが勧められていた。産後は子育てで多忙になるため、妊娠期間中に2人でいられる時間を大切に過ごすことや将来の子育てについて話し合うことも勧められている。経産婦の家族向けに、妊娠期からの上の子どもがさみしい思いをしないように世話をを行うことや上の子と一緒に妊娠を喜べるようにすることが記載されていた。

分娩期：分娩期での父親の役割としては、分娩に立ち合う際の具体的な支援方法が記載され、共に分娩を乗り越えていくことが奨励されていた。

産褥期：共通する内容は産後の母親の心身の変化、母親の精神的ケアや身体的ケアである。精神的ケアについては、分娩を終えた母親へのねぎらい、マタニティブルーや産後うつについての内容が、身体的ケアとしては、母親の家事や育児の負担を減らすことやバランスのとれた食事が摂取できるような配慮についてである。中には、「産後こそ、しっかり支え合いを」というサブタイトルで出産や育児で疲れている母親を支え、この時期を乗り越えることがその後の夫婦関係に

大きく影響するとし、積極的に母親に声掛けをすることと家事・育児の分担が重要であることが記載されている。「里帰り出産」の場合の注意として「子育てを0から始められずに、結果、父親としての自覚が生まれにくい」という傾向に触れ、まめに連絡をとることや妻の実家に向いて育児にかかわることが勧められている。

乳幼児期：記載されている対象の子どもの年齢は、誕生から1歳までのものから、誕生から小学校入学前までと幅がある。育児内容に関しては、子どもの成長・発達と子どもの世話の仕方、夜泣きの対処方法、事故防止など安全対策、子どもとの会話や遊び方、しつけやほめ方・しかり方が記載されている。その他に、出産後の公的な手続き、子どもの健診や予防接種などの健康管理に関する事柄、子どもの成長に関する祝い事が記載されている。子どもの成長に合わせたレシピや料理の手順、育児をしながらおしゃれを楽しむ方法が記載されているものもあった。月齢に合わせた子どもとのコミュニケーションの取り方や遊び方についても具体的にあげられている。乳幼児突然死の予防として、あおむけに寝かせることや禁煙などが記載されている。家庭での安全対策について家の見取り図が描かれ、各部屋で起こりうる事故の注意を呼びかけていた。ワーク・ライフ・バランスに関しては、勤務先の制度の活用方法、育児と仕事を両立する工夫、職場での理解者を増やすことなどがあげられている。育児休業取得については、母親と父親の育児休業のモデルパターンの例の記載も見られた。父親の役割として、積極的に職場や周囲の理解を得て、ワーク・ライフ・バランスをとっていくことが勧められていた。

【考察】各自治体で発行されている父親向けの手帳を父親が主体的に育児に取り組むという課題に応じた内容であるのかを分析・検討した結果、母親との関係での父親の役割、子どもとの関係での父親の役割、社会的立場においての父親の役割がみえてきた。

母親との関係において期待される父親の役割：収集した父親手帳17冊中、15冊は、妊娠期からの父親の役割に関する内容が記載されていた。共通しているのは、妊娠期から子育てが始まっていることが記載されている点である。明野<sup>3)</sup>は、妊娠初期の早い時期から、父親になる実感を持つことにより、育児技術の準備に加え、父親になる精神的な準備が整えられていくことが期待できると述べている。つまり、妊娠期から父親として胎児の存在を認識し、胎児の成長を見守り、育児の責任を担う父親としての自覚を促しているということである。育児の責任を負い、子どもとの生活体験の中で、子育てのスキルが身についていくものであり<sup>4)</sup>、産まれる前のできるだけ早い段階から胎児の成長・発達に関心を持ち、父親になったという責任感を持つことができるような支援が必要である。

今回収集した父親手帳の多くは、妊娠期から父親としての自覚を促しており、これは主体的な育児の取り組みへの導入として適切な働きかけといえる。母親との関係においては、母親の理解者、相談役、母親になる妻をいたわる、守る、サポートする、というようなことばで父親としての役割についてあげられている。父親の役割とは、単に家事を手伝うということではない。母親にとって必要なサポートをするには、母親の心身がホルモンの変動や腹部の増大によってどのように変化するかを知った上で、どのようなサポートが必要なのか理解して行うことである。特に、産褥期は妊娠・分娩による回復期であり、ホルモンの変動も劇的で、マタニティブルーや産後うつが起きやすい時期である。中でも2~3時間の間隔で行う授乳が、母親に慢性的な寝不足を招くことを父親達はイメージしにくい。母親にしかできない妊娠・分娩・授乳の役割を母親が健康的に安心して遂行するには、身近な存在である父親の理解とケアが欠かせないのである。出産についての話し合いについては、出産場所の選択や立ち合うかどうかの他に、「納得のお産」について夫婦で話し合って出産に臨むことの記載がある。産むのは母親と、母親任せにするのではなく、2人にとって望ましい出産とは何かを話し合い、積極的に関与することが期待されている。また、父親が分娩時に付き添うだけの傍観者にならないように、母親に直接関わって支援していく役割が期待されている。母親と父親が共に出産の時間を過ごし、夫婦で乗り越えたという実感が持てるような経験となるように促されている。夫婦関係が良好であるほど、父親になる実感や喜びが強いことが報告されている<sup>5)</sup>。父親となる過程では、良好な夫婦関係が基盤であり、父親手帳では子どもを迎えて家族になっていく前段階として夫婦関係の基盤づくりを奨励している。父親手帳には、共通して両親学級や出生前教室への参加が呼びかけられており、主体的に育児の知識や技術を学ぶことが望まれている。新しい家族を迎える物質的な準備として、例えば、ベビー用品やベビールームの準備などがある。これらの物質的な準備は、手段的(道具的)サポートといわれるが、共感や傾聴、認めるなどの情緒的なサポートも必要である。子どもが産まれると、妻と夫の2人の関係から、子どもの母親と父親になり、家族の関係性に変化が生じる。それまで、妻に任せてしていた事柄も妻任せではいられなくなる。そこで、「まずは自分のことは自分で」という自立を促す内容が記載されている。柏木<sup>4)</sup>は、日本の男性がおとなとしての発達が未熟であることに触れ、即ケアされることから卒業し、自立と同時に他者をケアする役割を担うことがおとなであると述べている。また、夫と妻が経済も生活も「ケアする/ケアされる」を共々に体験することがおとなの条件であり、それがお互いの精神的安

定をもたらすという<sup>5)</sup>。夫は、妊娠前と同様のケアを妻から受けることに甘んじ続けるのではなく、妻や子どもの生活をケアする側の役割があると認識するということである。父親の主体的なケアとは、共感や傾聴、認めるなどの母親への情緒的なサポートも含まれている。妻へのいたわりの気持ちは、父親になる意識に影響することが報告されている<sup>6)</sup>ことから、母親への情緒的なサポートを助長する働きかけは、父親の主体的な育児につながる支援といえる。子どもが生まれると以前の生活とは一変し、子ども中心の生活になることがあげられ、妊娠期から母親とのコミュニケーションを積極的にとることが勧められている。「新しい関係づくりのきっかけに」というタイトルで、やがて来る「赤ちゃんのいる暮らし」への準備の時間として2人で話し合うことを勧め、「出産に向けてすすめたいこと」では、家族の将来について語り合うことが奨励され、「新しい暮らしのデザイン」では出産後の新しい家族関係の模索について記載されている。日本の父親の子育ての質的特徴として、受動的な子育て、趣味・楽しみとしての子育て、“いいとこどり”の子育て、があるとされる<sup>7)</sup>。柏木<sup>8)</sup>は、子どもの誕生を契機に夫婦のパートナーシップが薄まり、子どもと母親の関係が強まることにつながると述べている。それは、先に述べた日本の父親の子育ての質的特徴があるためだと考えられる。父親も子育ての厳しさや困難さを主体的に経験することで夫婦のパートナーシップを強めることになる。新しい家族を迎え、夫役割だけでなく子どもの父親としての役割も加わり、家族の関係性が大きく変化することを含めて、父親としての心構えが必要となる。育児書にみる父親像を研究した山瀬<sup>9)</sup>によると、求められる役割は子どもに関するだけでなく、母親を支えること、特に精神的に支えることが重視されていた。子どもにとって重要なのは、二人の親が夫婦として調和した関係にあることが臨床ケースからも明らかにされており<sup>6)</sup>、母親と父親とが歩み寄り、パートナーシップをとっていくことが夫婦だけの家族から子どもを持つ新たな家族を形成するステップにつながるのである。

子どもとの関係において期待される父親の役割：子どもとの関係においては、子どもの理解者、教育者、遊び相手、扶養者、養育者、成長の記録者という役割についてあげられている。子どもへのかかわり方の中には社会的ルールやマナーを教える役割についても記載されている。父親の関わりが児童期の社会性に及ぼす影響の研究では、たとえ短い接触時間であっても子どもと積極的にコミュニケーションをとることが子どもの社会性の発達を促進しうることが明らかにされている<sup>10)</sup>。父親としての子どもへの関わりが、子どもの社会性の発達につながることを認識すれば、積極的な父親役割取得へのモチ

ベーションとなると考えられる。父親が子どもの自立に向けての役割があることを認識し、社会性発達への役割を発揮できる支援が必要である。子どもと触れ合うことや遊びを通して、絆を深めていくことがあげられている。父親の遊びの内容には、子どもの成長に合わせ体を使ったダイナミックな遊びをすることが記載されている。ただし、「揺さぶられ症候群」を誘発する恐れもあるので、その注意喚起も必要である。父親手帳には子どもの記録として写真の撮り方について取り上げられており、楽しみながら子どもとの時間をもち、成長を感じ取れるよう促している。育児に楽しみを見つけることは、意欲ややりがいにつながるが、そればかりが強調されるのは危険である。先に述べたように、育児の困難さに直面し、パニックに陥ることがないように、育児には困難なこともあるという事実も伝えていかなければならない。もちろん、乗り越えるための方法やソーシャルサポートがあること、そして乗り越えた先には子どもの成長の喜びがあることも伝えていくということである。それらは、先輩の父親達からの体験談で語られることが効果的であるといえる。父親は母乳を与えることはできないがミルクなら哺乳瓶で与えられるという記述もみられる。しかし、それは、母乳哺育が可能であるにもかかわらず、人工栄養への移行を助長することになりかねない。安易に人工栄養に切り替えることがないように、母乳栄養の利点を理解し母乳哺育をサポートするのが父親の役割であることを父親に伝えていかなければならない。離乳食についても記載があり、離乳食を食べさせるだけでなく、作るチャレンジも勧められている。子どもの歯磨きについても記載があり、父親が日常生活でできる役割としてあげられている。秋光ら<sup>10)</sup>は、父親の子どもとの接触時間を増やす努力は今後も社会全体で行わなければならない重要な課題ではあるが、当面の日常生活において父親が子どもに対してどのように関わっていくべきであるのかを考えることも現実的な問題であろうと述べている。父親が育児をイメージでき、チャレンジしようと思えるように、日常生活での具体的な育児内容を示していく必要がある。

社会的立場において期待される父親の役割：育児をすることによる社会的側面でのメリットについては、自活力がつくこと、地域とのつながりができ老後の安心につながる、仕事で有効な能力が身につく、アイディアが仕事に活かせること、父親自身の世界が広がり、人生が楽しくなることなどがあげられている。中には「新しい関係づくりのきっかけに」ということで、豊か人間関係を広げるチャンスとして、近隣住民との交流や公的制度やサービスの利用について記載されている。労働・子育てジャーナリストの吉田<sup>11)</sup>は、仕事にまい進してしまうことが人生における視野を狭めていることを憂い、子育て

を通じて地域活動に関わることの意味について述べている。地域活動を通じて次第に父親が地域の中に自分の居場所を得ていくことは重要で、同時に子どもはその父親の姿をみて地域社会のルールやコミュニケーションの大切さ、地域の人との付き合いの楽しさなどを学び育つことになる<sup>12)</sup>。子育てを糸口に地域のコミュニティとつながり、地域のコミュニティ機能を強化することが、自分の子どもだけの子育てではなく、地域で子どもを育て合うことにつながるのである。およそ30年前の育児書にみる父親の役割についての研究では、「育児は父母が共同で行う」としながらも、父親は仕事で忙しいので、せめて「あそび」で関わるようにと実際の育児は母親まかせという育児書が多かった<sup>13)</sup>。1990年以降に母親向けに発行された育児雑誌に関する研究<sup>14)</sup>によると、母親が自ら主たる育児担当者として、性役割を正当化し担っているという。また、元橋<sup>15)</sup>は、母子健康手帳の内容と形式を分析し、母親規範を強調し、母親に対して重い負荷をかけているのではないかという。今回、収集した父親手帳の多くには、ワーク・ライフ・バランスに関する内容があり、父親が育児休業を積極的に取得することを勧めている。森下<sup>16)</sup>は、父親を母親のサポート役という第二養育者の枠組みから脱して再考する必要があると指摘している。父親手帳における父親の育児休業取得の勧めは、これまでの第二養育者という立場から脱却する兆しといえる。しかし、単に父親が育児休業取得すれば、母親の育児負担の軽減につながるというわけではない。育児休業取得後の実際の過ごし方が問題である。父親手帳の巻頭文の中には、母親の手伝いではなく、積極的な育児を勧めている内容もみられた。父親が育児の補佐役ではなく、主たる育児者として、育児休業中にどう過ごしていくか、具体的に示していかなければならない。また、母親自身も伝統的な性役割にとらわれて、育児の責任を背負い込むことがないようにしなければならない。親となることによって成長・発達することとしては、柔軟性や自己制御、視野の広がり、生きがい、自己の強さなどがあげられている<sup>17)</sup>。吉田<sup>11)</sup>は、ワーク・ライフ・バランスの実現が自分の人生を豊かにする方法であることを多くの人に理解してもらいたいと述べている。ワーク・ライフ・バランスをよくするには、どんな家庭生活を望むのか、それを実現するためにはどんな制度が利用できるのか、どんな制度があれば実現できるようになるのかを個々人が考えること、そして行動することが必要である<sup>18)</sup>。父親自身が育児をすることにより得られる様々なメリットを理解できれば、育児に取り組む動機づけを強化していくことになるであろう。父親が主体的に育児に取り組めるように育児経験の積み重ねで得られる様々なメリットを伝えていくことが大切である。そのひとつの方法として父親手帳の活

用が大いに期待される。本研究では、各自治体で発行されている父親向けの手帳を父親が主体的に育児に取り組むという課題に応じた内容であるのかを分析・検討し、期待される父親の役割とその支援について考察した。父親手帳は、父親が育児に関心を持てるようにいろいろな工夫がなされ、父親が育児に関わろうとする取っ掛かりとして活用が期待できる手帳であることがわかった。父親手帳の分析から明らかにされた期待される父親の役割は、以下の通りである。以下の内容を考慮して父親が主体的に育児に取り組めるような支援に役立てていくことが重要である。妊娠初期から父親としての責任を自覚し、出産や育児の準備に取り組む。妊娠・分娩・産褥の母親の心身の変化を理解し、母親を支援する。母親とパートナーシップをとって新しい家族を形成していく。日常生活でできることを自らみつけ、家事や育児に取り組む。第二養育者に甘んじるのではなく、主たる養育者として育児に取り組む。育児の経験が自己の成長や社会とつながることのメリットを知る。地域のコミュニティとつながり、地域で子どもを育て合う。

## 2) 父親のコンピテンシー

対象：乳幼児の育児経験のある父親

データ収集と分析：研究の主旨を口頭と文書で説明し、了解の得られた父親7名に半構成的インタビューを行った。インタビューから得られた結果をコンピテンシーの3要素（知識、技術、態度）の視点で分析し、父親のコンピテンシーの構造及び育児支援ニーズを明らかにした。

用語の定義：父親のコンピテンシーとは、父親としての「能力」「適性」の意で、育児に成果を上げる行動特性のことである。また、単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、育児の課題に対応することができる力である。倫理的配慮：東京家政大学研究倫理委員会の承認を得ている。

【結果】乳幼児の育児経験のある父親7名にインタビュー調査を実施した結果、父親のコンピテンシーの知識の側面では、子どもの発達や子育ての知識以外に、母親の心身の理解に関する知識や育児と仕事の調整に関する知識などがあつた。父親のコンピテンシーの技術面では、子どもとのコミュニケーションにおいての辛抱強さや粘り強さなどの他に、母親とのコミュニケーションにおける交渉力がみられた。父親のコンピテンシーの態度面では、育児や家事への自発性や自主性、育児中の集中力の高さや融通性や寛容性などの他に子どもの成長・発達に関する感受性の高さがあつた。

【考察】父親のコンピテンシーには、子どもとの関係だけでなく、パートナーである母親との関係が重要であることが明らかになった。特に産後の母親は、ホルモン変動が著し

く、不慣れな育児で精神的に不安定になりやすいが、そのことを父親は敏感に感じ取っていた。産後の育児を乗り越えるには、母親への気づきがい重要であり、あらかじめ予測して心構えをしておく必要がある。父親は、母親を支えるにはどうしたらよいか戸惑いつつも父親としてできることを見つけようと努力していた。父親は、母親との役割の違いについて、母親の包容力および母親の子どもにとっての安全基地としての安定性を認識していた。また、その母親としての役割を尊重しつつ、父親のとしての役割を模索しながら育児に取り組む能力がみられた。子どもとの関係においては、些細なエピソードから子どもの成長・発達を見出すことができていた。例え、育児が思うようにうまくいなくても、育児の方法を工夫し、再度チャレンジしていた。子どもの成長・発達を親として喜び、親としての自信を持つことができた経験の積み重ねがコンピテンシーを高めていた。さらに、父親は育児の経験が父親自身の成長につながっていることを実感していた。父親達は、育児で子どもとの関わりを通して経験した出来事が仕事面に役立っているという。父親のコンピテンシーに関する育児支援のニーズには、妊娠期から夫婦間で親としてのコンピテンシーを高めあう支援の他に、同性である父親たちと育児について分かちあい、互いのコンピテンシーを高めあう機会が求められていることが明らかにされた。

#### 引用文献

- 1) 厚生労働省イクメンプロジェクト  
[http://ikumen-project.jp/project\\_about.html](http://ikumen-project.jp/project_about.html) (2015年9月30日)
- 2) 文部科学省 OECD における「キー・コンピテンシー」について  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryo/06092005/002/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryo/06092005/002/001.htm) (2015年9月30日)
- 3) 明野聖子. 妊娠期から乳幼児期における父親の親としての発達に関する文献レビュー. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 2013. 9(1). 65-71.
- 4) 柏木恵子. 子どもが育つ条件. 岩波新書. 2013
- 5) 佐々木裕子. はじめて親となる男性の父親役割適応に影響する要因. 母性衛生学会. 2004; 50(2): 413-421
- 6) 柏木恵子, 平木典子. 日本の夫婦パートナーとやっていく幸せと葛藤. 金子書房. 2014.
- 7) 平山順子. 妻からみた夫の子育て. 柏木恵子・高橋恵子編著. 日本の男性の心理学. 有斐閣. 2008.
- 8) 柏木恵子. 父になる、父をする-家族心理学の視点から-. 岩波書店. 2011
- 9) 山瀬範子. 育児書にみる〈父親〉像. 四国大学紀要. 2013; (39): 63-71.
- 10) 秋光恵子, 村松好子. 父親の関わりが

児童期の社会性に及ぼす影響. 兵庫教育大学研究紀要. 2011; (38): 51-61.

- 11) 吉田大樹. パパの働き方が社会を変える. 労働調査会. 2014
- 12) 石井クンツ昌子. 「育メン」現象の社会学. ミネルヴァ書房. 2013
- 13) 和久真己, 佐々木宏子. 育児書の中の父親の役割について-日本の場合-日本保育学会大会研究論文集. 1988; (41): 346-347.
- 14) 天童睦子編. 育児戦略の社会学. 育児雑誌の変容と再生産. 世界思想社. 2004.
- 15) 元橋利恵. 「男女共同参画」時代の母親規範-母子健康手帳と副読本を手がかりに-. フォーラム現代社会学. 2014; (13): 32-44.
- 16) 森下葉子. 幼児期の子どもをもつ父親の育児関与に関する研究の現状と課題. 学校教育学研究論集. 2007; (15): 15-28.
- 17) 柏木恵子, 若松素子. 「親となる」ことによる人格発達. 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究. 1994; 5(1): 72-83.
- 18) 長津美代子, 小澤千穂子. 新しい家族関係学. 建帛社. 2014.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

鈴木幹子, 期待される父親の役割 - 父親手帳の分析から -、東京家政大学研究紀要、査読有、第56集 (1). 2016. pp103-113

[学会発表](計 1件)

鈴木幹子, 期待される父親役割 - 父親手帳の分析から -、第56回日本母性衛生学会学術集会、2015年10月17日、いわて県民情報交流センターアイーナ(岩手県盛岡市)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

鈴木 幹子 (SUZUKI, Mikiko)  
東京家政大学・看護学部看護学科・教授  
研究者番号: 90269457

##### (2) 研究分担者

立石 和子 (TATEICHI, Kazuko)  
東京家政大学・看護学部看護学科・教授  
研究者番号: 80325472

##### (3) 連携研究者

玄番 千恵巳 (Genba, Chiemi)  
東京家政大学・看護学部看護学科・助教  
研究者番号: 60739423